家庭科通信

43
2010
Vol.15 No.3

◆研究室から 「きもの」文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって…… 3
横浜国立大学 薩本弥生

◆新しい動き 食事バランスガイドの変更点……10

◆エッセイ・和のある暮らし⑧ 手づくりの縁起物……21
石橋富士子

◆日本家庭科教育学会 第53回大会……12

［DATA FILE］「食事に関する習慣と規範意識に関する調査報告書」より…… 2
［Key Word］ CA貯蔵／巣ごもりリッチ／子ども・若者ビジョン……16
［Question & Answer］ イクメンプロジェクト……22

◆大修館書店 平成23年度 家庭科副教材等のご案内……17

大修館書店

DATA FILE

内閣府
「食事に関する習慣と規範意識に関する調査報告書」より
(2010年４月５日公表)

●食事のマナー　「音」に関するものを不快に感じる割合が高い

本調査は，食事のマナーや作法に対する意識や取り組み状況，マナーを身につけた場所，食事のマナーへのイメージ像を把握することにより，食事の正しいマナーや作法を含む食育の今後の推進に当たっての基礎資料とすることを目的として内閣府が実施した。調査対象は，全国の18歳以上の男女である。

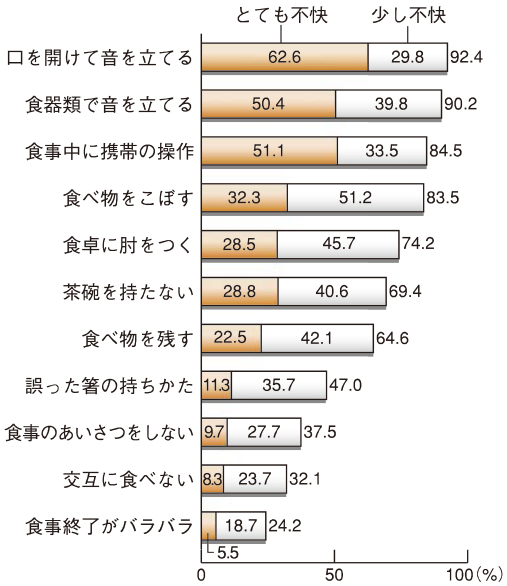
食事に関する習慣について，「家族全員で夕食を食べる頻度」は，「ほぼ毎日」が49.5%，「ほとんどない」が7.4%(20歳代では14.5%と高い)。食事のマナーに対する意識については，「口を開けて音を立てる」や「食器類で音を立てる」など音について不快に感じる割合が高い(▩1)。箸の使いかたに対する意識では，「寄せ箸」や「拾い箸」に不快感を感じる割合が高くなっている(▩2)。また，高齢になるほど不快感が強くなる傾向にある。

食事のマナーを習得した場所は，「家族での食卓」が９割を超えており，また，幼少時に家族の食卓で教えられた食事のマナーは，親になった場合にも子どもに教える割合が高い傾向がある。

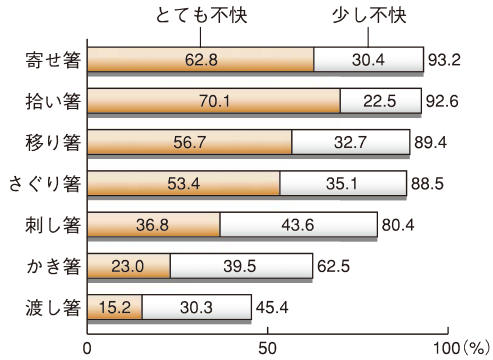
さらに，食事のマナーを身につけている者ほど，家族全員で夕食を食べる頻度，朝食の摂取頻度，栄養バランスの意識，食育への関心などが高いこともわかった。

●詳細は，内閣府(http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/research/h21/netchosa/index.html)で閲覧・ダウンロードできます。

▩1 食事のマナーに対する意識
(隣のテーブルでの他人の行為に対する意識)



▩2 箸の使いかたに対する意識
(同じ食卓を囲んでいる者がおこなった場合の不快感)



●寄せ箸：器を箸でひっかけて引き寄せること
●拾い箸：箸と箸で料理を渡し合うこと
●移り箸：一度箸をつけた料理を食べずに，他の料理へ箸を移すこと
●さぐり箸：料理の下の方から食べたいものを取り出そうとすること
●刺し箸：料理を箸で刺して取ること
●かき箸：茶碗に直接口をつけて掻き込むこと
●渡し箸：器に箸を掛け渡して，箸を休ませること

研究室から

「きもの」文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって

横浜国立大学　薩本弥生

はじめに

現代は核家族化の定着，便利な機器の普及，家事の外部化などによって，生活技術を伝承する機会が減少している。国際化・情報化の進展によってモノの入手が容易になる中で私たちの価値観も変化し，近年，和をテーマとした雑誌が発刊されるなど，日本の伝統的なモノに興味がもたれつつあるが，依然，古き良きモノや自国の伝統・文化への関心は低いようである。

被服に目を向けると，日本の「きもの」文化は，これまで日常着として，あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら，「きもの」の染色，織，縫製，着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが，日常着が洋装化し既製服が普及した今日，家庭において「きもの」文化に触れ，伝承される機会が減少してきたため，「きもの」文化がこれらの技術に支えられてきたことが理解されにくくなりつつある。

このような背景の下，2006年に教育基本法が改正され，「伝統や文化を尊重し，我が国と郷土を愛すると共に，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。この規定を受け，2008年３月の学習指導要領告示では，国際社会で活躍する日本人の育成のため，我が国の郷土の伝統や文化を受け止め，それを継承，発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。

そして，中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた。日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育，すなわち「きもの」文化をどのように教育していくかについての検討，新しい教育デザインが必要となってきている。

また，政府の施策の下，全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり，情報のみならず，人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く，日本の文化を世界に発信する機会が増え，文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし，日本で，そして世界へ日本の伝統文化をどのように伝えていくか，その方法についての検討もこれからの課題といえる。

筆者らは，このたび，「きもの」文化を取り扱い，「きもの」文化に対する理解を深める体験型教育プログラムの開発に取り組んでいる。ここでは，この体験型教育プログラムの開発に関する研究プロジェクトについて，その概要，および2009年度の活動内容をその中間報告書にまとめた内容[1)2)]をベースに紹介し，その後の私の教育・研究上の活動への波及効果についても紹介する。

開発のきっかけとなった海外研修

まず，筆者が国内での若者への「きもの」文化の伝承と，海外への発信についての教育プログラムを研究テーマにした，プライベートなきっかけについて述べる。

横浜国立大学教員海外研修制度により2008年３月31日から，イギリスのミッドイングランドにあるラフバラ大学において人間科学部のHavenith教授に師事し，客員研究員として７ヶ月間研修する機会を得た。個人的な事情により娘２人（当時13歳と11歳）を連れての子連れ留学となった。

ラフバラはレスター州に属し，北はノッティンガムやダービー，南はレスターの大都市に30分～１時間の距離で，イギリスの真ん中に位置するが自然にあふれ，子どもと過ごすにはとても良い

▩1娘たちと一緒に

▩2日本人留学生たち

町だった。

1.インターナショナルデイ

日本人会からの紹介で，４月下旬にラフバラ大学で年に一度開催される，留学生主催のインターナショナルデイに娘と一緒に参加し，お手伝いをした。

折り紙の実演やミニおにぎり，桜の花びらや抹茶入りのクッキーやカップケーキの試食品を配付した。書道コーナーでは毛筆で名前を漢字やカナで書いてプレゼントし，箸での小豆つまみゲームコーナーも設けた。書道コーナーは珍しいのか，行列が出来る人気だった。学生の皆さんの事前の準備のおかげで成功裏に終わり，楽しく興味深い体験が出来た。

私たちは娘たち共々，浴衣を着て日本をアピールした。浴衣は人目をひき，記念撮影を何度も頼まれた。日本の伝統文化としての「きもの」文化を気軽に演出できる浴衣のありがたみを感じた(▩1・2)。

2.イギリスで日本を意識した出来事

週末には気分転換に周辺都市の古城や博物館巡りをした。どんな田舎町でも博物館があり，その町の歴史的建造物や文化遺産を大切にしていた。また，イギリスには自動車，家電，ゲーム機などを中心に日本製品が普及していた。細やかな気配りのある日本製品は信頼されているようだった。日本のアニメやマンガも翻訳され，目についた。柔道らしき子ども向けの教室も地区センターで沢山開講されていて人気があるようだった。

娘たちが通っていた地元の小学校，中学校でも日本がテーマになった本を題材にすることや，日本の文化を紹介するビデオを見る授業があったそうだ。しかし娘たちに言わせると，少し間違ったことを先生が語っていたりして，英語がもっと流暢だったら正したくなることが多々あったようだ。

日本に戻ってイギリスでの半年間をふり返り，イギリス人の生活文化に触れることで日本のことを少し客観的にみることが出来たように思った。

その中で，日本での生活では当たり前に思っていた日本人の国民性(几帳面さ，勤勉さ，もの作りの技術等)やその成果である日本製品の品質の良さなど，日本人の良いところもいろいろと実感することが出来た。

その一方で，イギリス人は自国の伝統や文化を誇りに思い大切に守っているのに対し，日本人は，少なくとも私は欧米の文化に憧れが強く，日本の文化に自信をもっていただろうか，自国の文化を外国の人にも発信できていただろうか，と反省し，もっと知識をもちたいと思った。特に私は被服が専門であるのだが，その日本の伝統文化である「きもの」文化をもっと学び，外国の人にもきちんと伝えたいと思った。

おりしも，文化女子大学に文化ファッション研究機構が立ち上がり，「きもの」文化についての研究の公募があり，これに申請することとなった。2009年，申請した公募が採択となり，「きもの」文化の伝承と海外への発信についての本プロジェクト研究に着手できることとなった。

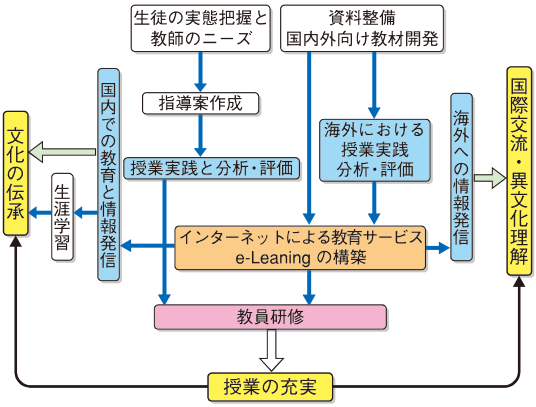
プロジェクト研究の内容

1.目的と概要

本プロジェクト研究の概要は▩3のとおりである。

この目的は，家庭科の授業の中で「きもの」の中でも最もカジュアルで身近である浴衣の着装を含

▩3本プロジェクト研究の概要[2)]



む体験的学習を通して，日本の「きもの」文化を次世代に伝承することを意図して，教育プログラムの開発と授業支援を行うことである。

これらの実践を通じて子どもたちの心に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする芽を育てることができるのではないか，また，グローバル化に対応し，外国の中学校での浴衣の着装を含む体験的授業実践を通して，日本理解と文化交流の促進に貢献できるのではないかと考えている。

2．プロジェクトの実践内容

1）授業研究用教材，着装ビデオ作成

大妻女子大学総合情報センターメディア教育開発センターで2009年７月に撮影を実施し，日本語版，英語版ナレーションの録音，編集を行い，男女用の浴衣の着装・たたみ方のDVDを作成した（▩4）。

また，着つけに関するテキスト教材に向けてはプロのイラストレーターに委託してイラスト作成する他，浴衣生地の産地や工程に関する教材作成のための取材として浴衣の伝統的な染めの技法を学ぶため，浜松の浴衣の「注染」染め工場および八王子の「長板中形」染め工場の見学を行った。さらに，浴衣着装DVDを用いて，「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切り口としたホームページの作成，すなわち，インターネットによるe-Learning教育環境の整備に着手した。

現在，男女別に浴衣の着つけ方法・たたみ方を動画等で学べる「着方が分かる」部分のみ，本学教育人間科学部マルチメディア文化課程のスタッフに委託し，e-Learning教材として以下のサイトにアップしている。日本語版と英語版がある。授業では習得までは難しいため，自習用の浴衣の着つけの練習に活用してほしい。

http://kimono-bunka.ynu.ac.jp

▩4浴衣着装DVDと編集作業風景[2)]

2）浴衣を題材とした日本での授業研究の実施

浴衣を題材とした授業研究の一環で，2009年７月～10月に協力校の一つ，本学（横浜国立大学）教育人間科学部附属横浜中学校において葛川幸恵教諭に授業実践を依頼し，授業研究に着手した。

第２学年対象の授業では授業前に，

①浴衣やきもの「文化」に関する意識調査を行い，授業で着装に関するビデオを見た後に，

②浴衣の着装・たたみ方ビデオの分かりやすさの評価を行い，たたみ方と着装の各授業後に，

③浴衣のたたみ方，着装の仕方に関して興味・関心，理解度，習熟度に関する調査を行った。

第１学年対象の授業では被服の役割・自分らしい着装について学んだことを踏まえ，洋服とは異なる和服の特性について授業を受けた後，実際に

▩5研究授業の様子[2)]

▩6イギリスでの浴衣の着つけワークショップ[2)]

浴衣の着装を行い，たたみ方の学習をした(▩5)。

本年度は，昨年度の授業実践の内容を踏まえ，プロジェクトメンバーが作成した指導案のマスタープランを基に，協力校(千葉県立流山南高等学校，私立吉祥女子高等学校，私立洗足学園中学校，横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校，川崎市立金程中学校)の担当者と打ち合わせを行い，教材内容について検討するとともに，現場の実情に合わせて指導案の擦り合わせを行い，授業を実践していただいている。

これから授業分析・評価を進めていくが，協力校の先生方のご尽力で興味深い結果が得られると思われる。

3) 海外での着装ビデオを用いた浴衣着装の実践

海外での授業実践の準備としてイギリスのラフバラにおもむき，日本人会およびラフバラ大学のDesign & Technology Departmentの共同研究者Zanker氏の協力により，現地の大学生および社会人対象に授業研究の準備段階として，

①日本の伝統文化に関するアンケート
②開発した英語版着装ビデオを用いた浴衣の着装体験
③浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価
④着装後の着装感についてのアンケート

を行った(▩6)。

着つけワークショップの様子は，次のラフバラ大学のホームページに紹介されている。
http://www.lboro.ac.uk/service/publicity/news-releases/2009/142_JapaneseTeachers.html

研究プロジェクトは本学のホームページでも次のサイトに紹介された。
http://www.ynu.ac.jp/topics/topics_09_085.html

研究プロジェクトの今後

紹介された教育プログラム開発の研究活動は，大きく二つに分けられる。一つは，国内の中学生・高校生を対象とした教育活動，もう一つは海外の中学生を対象とした活動である。従来の教育プログラムの開発は，特に日本の文化を題材とした場合，国内に限られるものと考えられるが，海外からの観光客も増えている今日，国内の中学生を対象とした教育プログラムを基盤に，海外での教育プログラム開発まで検討した教育のデザインは，今までにない試みといえる。

従来，和服文化の伝承の媒体として浴衣をとらえた研究[3)~6)]は見られるが，教育と直結した形での検討[7)~8)]は極めて少ないと推察される。また，一般に，和服の着装のDVDは販売されているが，これを中学校，高等学校での教育に取り入れることは行われてこなかった。中学生，高校生が見て分かりやすい着装DVDを開発し，研究授業に提供することは，新しい教育デザインの検討として位置づけられる。

本プロジェクトの研究活動では「きもの」の中でも最もカジュアルで身近な浴衣を取り上げている。そして，浴衣を題材とした着装を含む学習を通して，子どもたちの心に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする芽を育みたいと考えている。

このような意図で「きもの」の着装に関して，教育の現場で実際の研究授業を行い，着装教育にどのような準備が必要であるか，どのような方法がよいか，などの検討は，特に学術レベルでは十分に行われておらず，このような実践の蓄積が，新しい教育のデザインを組み立てていく上で欠くことができない作業である。

大学生を主な対象とした「浴衣」に対するイメージ評価に関する研究は，いくらか見られる[9)~11)]。これらを踏まえ，「浴衣」の着装に伴う，中学生・高校生が外見および心の変容により，衣服を着ることについて考えることを促すという側面，衣服

の社会的役割について理解するという側面について検討する必要がある。本研究プロジェクトはこのような側面についても十分検討していく方向で進んでおり，この点でも，衣服に関わる新しい教育デザインのあり方を模索できるのではないかと考えている。

さらに，海外における「浴衣」の着装教育においても，日本と同様，準備・方法の検討を含め実践を試み，これを踏まえて教育方法をさらに詳細に検討する積み重ねが必要である。

今後，「浴衣」を題材として，今回紹介した活動に加え，概要(p.5▩3)に示したとおり，国内外向けの資料の開発，授業実践と授業方法の検討，さらには，国内外向けのe-Learningの構築等の研究活動を行っていく。

これらの研究活動により，「きもの」文化に関わる新しい教育プログラムが開発され，より着実に実践できる教育デザインを示していけるよう活動していく予定である。示された教育デザインは，今後，日本文化の教育が必要とされる教育現場での授業の充実に役立つものである。また，生涯学習にも応用でき，文化の伝承に寄与するとともに，日本文化の海外への発信の一助となると考えられる。

プロジェクト実践の波及効果

1．学内での浴衣ファッションショー

筆者は，本学の教員養成のための授業で「被服造形学及び実習Ⅰ」という授業を担当しているが，先に紹介した海外研修での体験や本プロジェクトがきっかけで，2年前から実習の題材として浴衣を選択し，製作を行っている。現場の家庭科を担う教員として被服製作の技能を習得するだけでなく，日本人として和服文化を被服構成面からも学んでもらいたいと考えての選択である。

最近は，中学で被服製作が選択科目になり，高校でも大学受験のため家庭基礎履修の学生が多く，実習の経験が減っている。また，家庭でも親子で被服や小物の製作などをする家庭が減少気味で，被服製作が苦手な学生が増加傾向にある。

そんな学生たちには浴衣製作は，結構大変である。富士登山にたとえて，山登りの途上は幾多の困難があり，先が見えない焦燥感に駆られるが，

▩7浴衣ファッションショー

最後に頂上に到達したとき，すなわち出来上がって浴衣ファッションショーを終えたときは，富士山の頂上からの景色を眺めたような達成感が得られるはずと言って学生を激励しつつ，授業を進めた。

今年は，履修学生のうち半数が男子という異例の事態のため，例年よりも苦労する点も多く，ショーの前日までかかって浴衣が完成するというギリギリの学生もいたが，何とか間に合わせて当日には出来たての浴衣を着てショーを繰り広げた。それまでの苦労も忘れるような，とても楽しいショーになった(▩7)。

また，完成までの動機づけのため，浴衣ファッションショーは公開にして，学内の図書館のメディアホールという舞台を用意し，今年は大学のホームページでも広報していただいた。次のサイトを参照してほしい。

(http://www.edu.ynu.ac.jp/hus/edu/644/)
http://www.ynu.ac.jp/hus/koho/1025/detail.html

前年度のショーは，こちらのサイトに掲載している。

http://ynu-satsumoto-labo.ynu.ac.jp/index.html

2．留学生の夕涼み会での浴衣着つけ企画

研究プロジェクトのことを大学の広報に紹介いただいたことがきっかけで，本学国際課からの依

▩8着つけの手伝いをしてくれた学生たち

頼で学内の留学生の夕涼み会というイベントをお手伝いすることになった。例年行われている民族舞踊や民権の太鼓の演奏に加え，我々は，浴衣の着つけ企画を手伝った。

着つけをするにあたり，筆者が開講している被服造形学実習で浴衣製作を経験したことのある学生を中心に協力を要請したところ，▩8に示すように学部から院生まで十数名の学生たちが集まってくれた。学生たちの当日の頑張りのおかげで，とても好評だった。学生たちにとっても留学生との交流がもて，日本文化を見直す意味でも，興味深く，楽しい体験になったようだった。

留学生担当の教員から当日の着つけを体験した留学生の様子に関して次のような感想をいただいた。「着つけてもらった留学生たちは，嬉しくて仕方ないという表情だった。最初躊躇していた学生たちも，他の学生たちが着ているのをみて着つけ体験し，はにかみながらも満面の笑みを浮かべていた。当初留学生や外国からの来客がどのくらいきものへの興味があるのか不明だったが，一様にきものに強い関心を示すことが分かった」。

留学生の夕涼み会は次のサイトに紹介されている。

http://www.kokusai-senryaku.ynu.ac.jp/album.html#yusuzumi

最後に

日常着が洋服となり，既製服が普及した今日，家庭において和服文化に触れ，伝承される機会が減少してきたため，和服文化がこれらの技術に支えられてきたことが理解されにくくなりつつある。

私たちの衣生活を支えてきた和服文化やその染色・織・縫製・着装に関わる技術には，学ぶところがたくさんある。機会あるごとに意識的に触れようとしないと和服文化の良さが理解されない。是非，触れる機会を積極的にもってほしいと思う。普段の生活は動きやすい洋服で結構だが，和服の良いところは受け継ぎ，現代の暮らしに生かしていけたらと思う。日本の伝統文化を理解することは，自国の文化に誇りをもつことにつながる。

また，国際交流の場で日本の文化を理解し，一部の技術を身につけておけば，日本の文化を世界に発信することもできるようになる。様々な国や民族の歴史や伝統的な文化を知り，理解し，文化の違いを尊重し合える関係を築いていく上でも大切なことである。

さらに本研究は筆者自身新たな研究分野へ挑戦をするきっかけになったと思う。これまでの研究は条件を統制して行う実験的研究が多かったため，実験誤差はあるものの，研究手法そのものは定まっている。一方授業研究は，まず研究者と実践者が同一でなく，現場の先生の授業実践に大学の教員が関わって，なるべく客観的に実践結果を評価し，より良い指導案に反映させていく過程をへる。

内容をより良くしていく試行錯誤的な要素が大きいこと，たとえ同じ指導案でも，現場の先生の力量次第ですばらしい授業になることも，そうならないこともあるということ，この二つの点では，まだまだ模索中である。

また，本プロジェクト研究は，家庭科教育学，教科教育内容(被服学)，日本文化としての「和服」の研究者がそれぞれの専門性を生かして研究に取り組んでいる。一つのテーマに多様な専門からのアプローチで取り組む研究活動は，筆者にとっても初めての経験であり，チームワーク，フットワークのよい活動である。また，数多くの協力者，そして学生たちの活動に支えられており，このことは，筆者のこれからの研究を進める上での財産となり，示唆に富むものとなっている。

今年は，プロジェクトの研究期間3年間の2年目である。本研究の過程で，また本研究の学会発表などにあたり，研究プロジェクトの趣旨を説明すると，その意義に共感いただく人がほとんどであった。日本人であれば，DNAに刻まれた何かが現在の利便性重視の社会の現状に危機感を感じさせるのかもしれない。

最近は，若者を中心として，花火大会をはじめ，浴衣での外出がファッションの一つとしてとらえられている。本プロジェクトでは，このような日本文化を楽しむ機会に，「きもの」の着装に困ることがない，「きもの」文化の伝承のあり方，そして教育のあり方，海外への発信の方法についての研究を進めている。そして，文化ファッション研究機構の報告書をはじめとして，広く社会に紹介する機会をなるべく多くもちたいと考えている。本研究の今後を見守っていただき，お考え，ご意見があれば寄せていただけるようお願いしたい。

著者連絡先：satumoto@ynu.ac.jp

謝辞

本プロジェクト研究は，文部科学省の「人文学および社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」の委託を受け，「服飾文化共同研究拠点」として文化女子大学文化ファッション研究機構により採択された，2009年度から2011年度までに実施される服飾文化共同研究，研究課題名「『きもの』文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発―『きもの』の着装を含む体験学習と海外への発信―」として実施された。

著者の他，堀内かおる氏(横浜国立大学)，川端博子氏(埼玉大学)，扇澤美千子氏(茨城キリスト教大学)，斉藤秀子氏(山梨県立大学)，呑山委佐子氏(大妻女子大学)の６名による共同研究である。先生方のご尽力に，この場を借りてお礼申し上げる。

また，研究に当たり下記の方々にご協力いただいた。

大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター 山田光栄氏，同大学助手 與儀由香里氏，同大学学生 松田美波氏，翻訳家 増田久美子氏，横浜国立大学非常勤講師 角田麻里氏，同大学教育人間科学部附属横浜中学校家庭科 葛川幸恵教諭(当時)，同大学教育人間科学部マルチメディア文化課程 山本光氏，同大学学生 竹内達哉氏ら，同大学学生 遠藤亮将氏，埼玉大学学生 松井萌恵氏，千葉県立流山南高等学校家庭科 仲田郁子教諭，私立吉祥女子高等学校家庭科 樋浦陽子教諭・山根晶子教諭，私立洗足学園中学校家庭科 山口香教諭，横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校家庭科 中尾由美子教諭，川崎市立金程中学校家庭科 長谷川伸子教諭，文化学園服飾博物館学芸室室長 植木淑子氏，浜松織物染色加工協同組合事務局長 曽布川之宏氏，二橋染工場専務 二橋教正氏，野口染め工場社長 野口汎氏，Design & Technology Department Nigel Zanker氏，ラフバラ町日本人会 篠沢久二子氏，浴衣着つけプロジェクトに参加して下さった皆様。ここに紹介し，感謝の意を表したい。

■引用文献

1) 薩本弥生，川端博子，堀内かおる，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発―「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信―」『服飾文化共同研究報告2009』p.90-95，2010年，服飾文化共同研究拠点，文化ファッション研究機構，文化女子大学
2) 薩本弥生，川端博子，堀内かおる，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，「『きもの』文化にかかわる教育プログラム開発の教育デザイン」『教育デザイン研究』１号，p.100-102，2010年，横浜国立大学教育デザインセンター
3) 城眞理子，内田恵美子，幡野暁子「和服文化の伝承媒体としてのゆかたを考える」『繊維製品消費科学会誌41(4)』p.45-55，2000年
4) 小菅充子，布施谷節子「三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(4)：食生活と衣生活における祖母との同居・非同居の関連性」『和洋女子大学紀要　家政系編42』p.81-89，2002年
5) 布施谷節子，小菅充子，中島明子，名取史織，三善勝代「三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(3)：男子学生と女子学生の比較」『和洋女子大学紀要家政系編42』p.109-124，2002年
6) 小菅充子，布施谷節子「三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(1)：食生活と衣生活について」『和洋女子大学紀要　家政系編41』p.97-106，2001年
7) 中村哲編「伝統や文化に関する教育の充実―その方策と実践事例―」2009年，(株)教育開発研究所
8) 鈴木明子「被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討―浴衣製作実習における学生の記述分析を通して―」『日本教科教育学会誌，26(3)』p.33-39，2003年
9) 川上梅「再見による服装イメージ評価の変化―中学・高校・大学生女子の新奇なゆかたに対する印象」『繊維製品消費科学会誌44(11)』p.673-681，2003年
10) 呑山委佐子，小嶋葉子，田村友香「女子大生の和服に関する意識と変わり浴衣の受容態度」『大妻女子大学家政系研究紀要38』p.31-41，2002年
11) 杉山真理，小林茂雄「女子大学生のゆかたに対するイメージ」『共立女子大学家政学部紀要40』p.37-42，1994年

新しい動き

日本人の食事摂取基準(2010年版)の改定をふまえた食事バランスガイドの変更点

▲2010年３月31日，厚生労働省・農林水産省は食事バランスガイドを見直し，一部の変更をおこなうことを発表した。

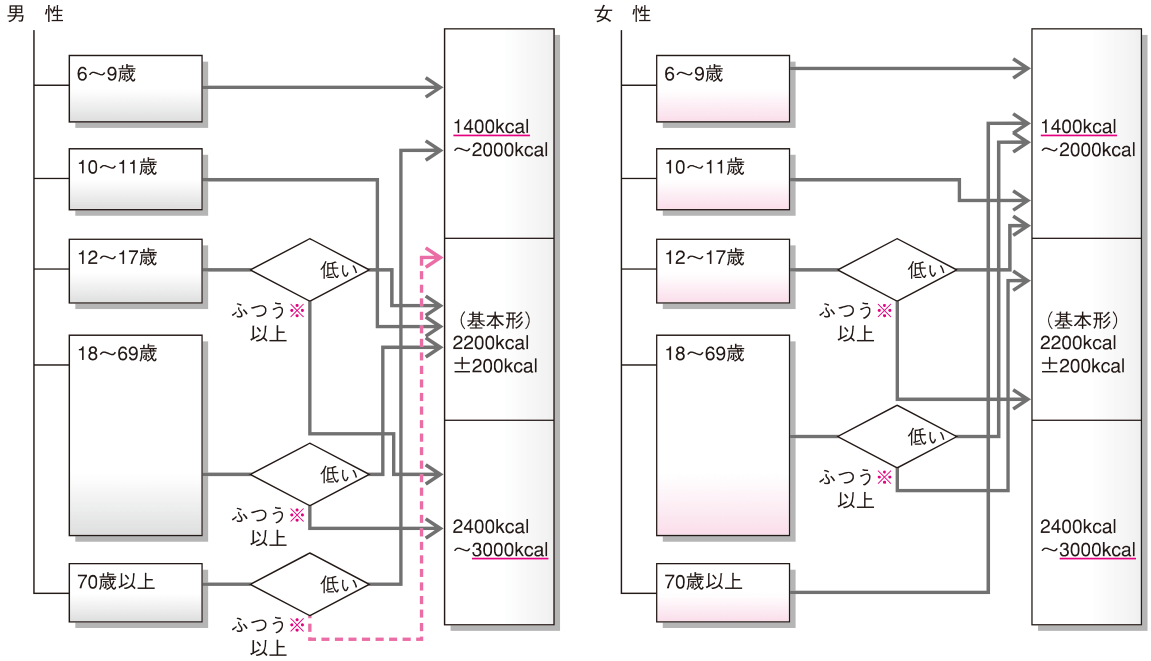
１．料理区分ごとの摂取の目安(SV)の基礎となるエネルギー量の区分の変更について

食事摂取基準（2010年版）における推定エネルギー必要量の変更にともない，６～９歳の子どもで1,600kcalを下回るケース，その一方，身体活動レベルの高い男性で2,800kcalを上回るケースと，現行の区分では対応できない部分が生じてきた。したがって，低い方では1,400kcal程度，高い方では3,000kcal程度まで対応できるように，エネルギー量の幅を広げた。なお成長期で身体活動レベルが特に高いまたは低い場合は，主食・副菜・主菜について，必要に応じてSV数を増減させることで適宜対応することとする。

これにともない，性・年齢，身体活動レベルからみた１日に必要なエネルギー量と摂取の目安について，▩1のとおり変更した。なお，身体活動レベルについては，「低い」「ふつう以上」の２区分とした。

▩1 食事摂取基準(2010年版)による性・年齢，身体活動レベルからみた１日に必要なエネルギー量と「摂取の目安」

変更点については点線- - -および下線



身体活動レベル

「低い」：生活の大部分が座位の場合

「ふつう以上」：座位中心だが仕事・家事・通勤・余暇での歩行や立位作業を含む場合，または歩行や立位作業が多い場合や活発な運動習慣をもっている場合

※　強いスポーツ等をおこなっている場合には，さらに多くのエネルギーを必要とするので，身体活動のレベルに応じて適宜必要量を摂取する。

○　成長期で，身体活動レベルが特に高いまたは低い場合は，主食・副菜・主菜について，必要に応じてＳＶ数を増減させることで適宜対応する。

○　肥満（成人でBMI≧25）のある場合には，体重変化をみながら適宜，「摂取の目安」のランクを１つ下げることを考慮する。

2．上記１のエネルギー量の区分に応じた摂取の目安(SV)の変更点について

上記１のエネルギー量の３区分に応じた主食，副菜，主菜等の５つの料理区分における摂取の目安については，食事バランスガイドの作成時に用いた料理データベース[1]と，それ以降，新たに研究で開発された料理データベース[2]を用いて検証をおこなった結果，現行どおりのSVを基本とすることとした。なお，実際の食事パターンにもとづいた詳細分析の結果[2]，2,400kcal以上のエネルギー区分においては，主食のSVをこれまでの７～８SVから６～８SVとした方が，食事摂取基準(2010年版)への適合がよいことが確認されたことから，変更を加えた(▩2)。

▩2 食事摂取基準(2010年版)による対象者特性別，料理区分における摂取の目安

変更点は下線
単位：つ（SV）

〈対象者〉	〈エネルギー〉kcal	主食	副菜	主菜	牛乳・乳製品	果物
・６～９歳男女 ・10～11歳女子 ・身体活動量の低い12～69歳女性 ・70歳以上女性 ・身体活動量の低い70歳以上男性	1400 1600 1800	4～5	5～6	3～4	2	2
・10～11歳男子 ・身体活動量の低い12～69歳男性 ・身体活動量ふつう以上の12～69歳女性 ・身体活動量ふつう以上の70歳以上男性	2000 2200 2400	5～7		3～5		
・身体活動量ふつう以上の12～69歳男性	2600 2800 3000	6～8	6～7	4～6	2～3	2～3

・1日分の食事量は，活動（エネルギー）量に応じて，各料理区分における摂取の目安（つ（SV））を参考にする。
・2200±200kcalの場合，副菜（5～6つ（SV）），主菜（3～5つ（SV）），牛乳・乳製品（2つ（SV）），果物（2つ（SV））は同じだが，主食の量と，主菜の内容（食材や調理法）や量を加減して，バランスのよい食事にする。
・成長期で，身体活動レベルが特に高い場合は，主食，副菜，主菜について，必要に応じてSV数を増加させることで適宜対応する。

【出典】
１）厚生労働省・農林水産省：フードガイド(仮称)検討会報告書 食事バランスガイド，p36～41，平成17年。
２）平成21年度厚生科学研究費補助金(循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業)「日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討」報告書。「日本人の食事摂取基準(2010年版)」に基づく食事バランスガイドのサービング数設定方法の検討。(研究分担者 吉池信男，研究協力者 早渕仁美，松永泰子，永原真奈見)

日本家庭科教育学会
第53回大会

▲2010年７月３～４日，日本家庭科教育学会第53回大会が，京都市の京都テルサで開催された。

【研究発表】

Ａ１－１　高等学校における栄養バランスの良い食事に関する指導方法の比較―栄養素・食品・料理・食事のつながりの理解を求めて―
東京都立忍岡高等学校　佐藤真紀子

Ａ１－２　高等学校家庭科における食生活観の醸成―食生活と社会とのかかわりを考慮して―
横浜国立大学教育学研究科(院生)　梅田有希子
東京都立忍岡高等学校　佐藤真紀子
横浜国立大学教育人間科学部　金子佳代子

Ａ１－３　中・高校生の食情報に関する実態と家庭科における課題
ボディ・イメージとダイエットへの関心
聖徳大学人間栄養学部　河野公子
神田由紀

Ａ１－４　英国におけるクッキングバスを活用した食育の推進
奈良教育大学教育学部　鈴木洋子

Ａ１－５　調理実習における自己評価表の開発―自己学習力を高めるFBシートの開発―
福岡県立稲築志耕館高等学校　林田秩子
福岡県立東鷹高等学校　筒井佐和子
福岡県立八幡中央高等学校　加藤(植山)敦子
福岡県立北筑高等学校　平野いずみ

Ａ１－６　家庭科を中核とする食育プログラムの開発
米飯とみそ汁の学習を中心にして
佐倉市立南志津小学校　児玉喜久子
千葉大学　石井克枝

Ａ２－１　「幼児への関わり方」を学ぶ授業実践
中学生のふれ合い体験ビデオ視聴から
埼玉県さいたま市立本太中学校　金子京子
東京学芸大学教育学部附属竹早中学　阿部睦子
東京学芸大学教育学部　倉持清美
香川大学教育学部　妹尾理子
秋田大学教育文化学部　望月一枝
東京都調布市立第一小学校　西岡里奈

Ａ２－２　家族的価値を問い直す教材開発の試み
同性カップルの「家族」を描いた絵本を例に
横浜国立大学教育人間科学部　堀内かおる

Ａ２－３　家庭科教育の逆機能―ひとり親家族を生きる子ども達の会話分析から―
和歌山大学　本村めぐみ

Ａ２－４　公認されない悲嘆へのケア
大学生の人工妊娠中絶について
上越教育大学　得丸定子

Ａ２－５　「教育カルタ」の教材としての汎用性
―大学生と中学生のジェンダー意識の分析―
東京家政大学短期大学部　青木幸子

Ａ２－６　小学校家庭科におけるロールプレイングを用いた授業が児童の自尊感情に与える影響
福山市立女子短期大学　正保正惠
広島大学付属三原小学校　林原　慎
広島大学大学院教育学研究科　伊藤圭子

Ａ２－７　日常生活を可視化する小学校家庭科の授業開発
―家族の仕事と自分の役割に着目して―
横浜市立新吉田小学校　本庄則子
横浜国立大学　堀内かおる

Ａ４－１　高校家庭科における「生活費教育」が経済的自立意識に与える影響
東京学芸大学大学院連合教育学研究科(院生)　鎌田美穂
東京学芸大学教育学部　大竹美登利

Ａ４－２　高校生の生活設計への積極的態度に影響を及ぼす要因
千葉県立流山南高等学校　仲田郁子
千葉大学教育学部　久保桂子

Ａ４－３　高校生の金銭管理の実態―費目に着目したワークシートを通して―
東京都立芦花高等学校(非常勤)　小守友里恵
女子栄養大学非常勤講師　山田　忍
女子栄養大学　仙波圭子

Ａ４－４　生活資源から「セーフティネット」を考える授業開発
東葉高校　若月温美
千葉大学　中山節子
法政大学高等学校　冨田道子

愛媛大学　藤田昌子
田園調布雙葉中・高等学校　中野葉子
神奈川県立麻生総合高校　松岡依里子
都立大江戸高校　坪内恭子

Ａ４―５　働き方によるセーフティネット格差を考える授業開発
神奈川県立麻生総合高校　松岡依里子
都立大江戸高校　坪内恭子
愛媛大学　藤田昌子
千葉大学　中山節子
東葉高校　若月温美
法政大学高等学校　富田道子
田園調布雙葉中・高等学校　中野葉子

Ａ４―６　家庭科における消費者市民教育の意義
東京家政学院大学現代生活学部(非)　神山久美

Ａ４―７　大学生における小・中・高等学校家庭科の学習実態と家庭科に対する意識
鹿児島大学教育学部　黒光貴峰

Ａ５―１　小学校家庭科衣生活領域ミシンの扱い方を学ぶ学習における教育用デジタルコンテンツの利用に関する研究
東京学芸大学教育学研究科(院生)　安部　暖
東京学芸大学教育学部　大竹美登利

Ａ５―２　小学校家庭科の巾着袋製作学習における自己評価活動の認知過程分析
広島大学大学院教育学研究科　一色玲子
鈴木明子

Ａ５―３　資源の大切さに気づかせることをねらいとした教材開発と授業の展開―衣生活における不要な布を使ったスリッパ作りの授業実践―
大西友恵

Ａ５―４　被服製作に関する帰国生の知識と技能の実態
高等工科学校　山崎真澄
東京学芸大学　池﨑喜美恵

Ａ５―５　地域の自然素材を生かした染色教材の開発
環境教育的視点から
茨城大学　木村美智子

Ａ５―６　地域の伝統産業と連携した家庭科教育プログラムの開発―甲斐絹の伝承と発信をめざした産官学プロジェクトの一環として―
山梨大学教育人間科学部　志村結美
山梨県立大学人間福祉学部　斉藤秀子

Ａ５―７　家庭科教育専門教科の服飾文化における伝統色彩に関する一提案
香取神宮の御田植祭の事例調査を中心に
愛国学園大学　早川礎子

Ｂ１―１　栄養の認識を深める学習の工夫
「おいしさ」を中心におき，他教科と関連させて
千葉大学教育学部附属小学校　佐藤雅子
千葉大学教育学部　石井克枝

Ｂ１―２　トランスセオレティカル・モデルに基づいた栄養教育プログラム「La Cocina Saludable」に関する研究
広島大学大学院教育学研究科(研究生)　柴　英里

Ｂ１―３　食品添加物に対する消費者の認知構造分析
株式会社アミタ持続可能経済研究所　大南絢一
大石太郎
高原淳志
近畿大学　有路昌彦
上野製薬株式会社　北山雅也
本多純哉
荒井　祥

Ｂ１―４　食育実践事例の特徴
文部科学省委託事業の実践事例の分析から
埼玉大学教育学部　河村美穂

Ｂ１―５　家庭科領域における高大連携教育の開発と今後の方向性
京都高大連携実践共同教育プログラムを通して
京都府立城陽高等学校　高取逸子
兵庫教育大学　増澤康男

Ｂ１―６　家庭科教育における言語活動の追究
埼玉県戸田市立笹目中学校　齋藤和可子
植草学園大学

Ｂ１―７　高等学校家庭科における「食文化」の単元構想とその評価
日韓食文化 比較を教材として
兵庫県立尼崎高等学校　武岡幸子

Ｂ２―１　高校教育改革を背景とした教育課程における家庭科の変化―神奈川県立高校の場合―
横浜国立大学教育人間科学部　鈴木敏子
上越教育大学大学院学校教育研究科　佐藤ゆかり
秋田大学教育文化学部　小高さほみ
東京都立本所高等学校　石引公美
私立正則高等学校　鈴木博美

Ｂ２―２　東京都内私立高校における家庭科の現状
私立正則高校　鈴木博美
秋田大学教育文化学部　小高さほみ
上越教育大学大学院学校教育研究科　佐藤ゆかり

横浜国立大学教育人間科学部　鈴木敏子
東京都立本所高等学校　石引公美

B２―３　新潟県内私立高校における家庭科の現状
上越教育大学大学院学校教育研究科　佐藤ゆかり
秋田大学教育文化学部　小高さほみ
横浜国立大学教育人間科学部　鈴木敏子
私立正則高等学校　鈴木博美
東京都立本所高等学校　石引公美

B２―４　高校家庭科の単位減をめぐる現状・課題
愛媛大学教育学部　野中美津枝
福井大学教育地域科学部　荒井紀子
北海道教育大学　鎌田浩子
國學院大學栃木短期大学家政学科　亀井佑子
北海道教育大学旭川校　川邊淳子
千葉大学教育学部附属教育実践総合センター(非)
川村めぐみ
鹿児島大学教育学部　齋藤美保子
神奈川県立横浜修悠館高校　新山みつ枝
大阪教育大学教育学部　鈴木真由子
岩手大学教育学部　長澤由喜子
佐賀大学文化教育学部　中西雪夫
金沢大学学校教育学類　綿引伴子

B２―５　家庭科教員養成において授業を分析的に見る方法の検討
新潟大学　高木幸子

B２―６　家庭科教育実習における実習生の実態と意識
福岡教育大学教育学部　貴志倫子
佐賀大学文化教育学部　中西雪夫
大分大学教育福祉科学部　財津庸子
九州女子短期大学初等教育科　柳　昌子
長崎大学教育学部　赤崎眞弓
熊本大学教育学部　宮瀬美津子
九州女子大学人間科学部　小林久美
宮崎大学教育文化学部　福原美江
福岡教育大学教育学部　長山芳子

B３―１　家庭科住まい学習における環境教育
香川大学教育学部　妹尾理子
井口真由美

B３―２　住まいを基本舞台として家庭生活を総合的に考える
奈良県立磯城野高等学校　川合みちる
甲南女子中高等学校　龍野征代
兵庫県立村岡高等学校　仲島尚子
大阪府立豊中支援学校　平野道子
大阪教育大学　大本久美子
滋賀大学　矢野由起

B３―３　住まいを基本舞台として家庭生活を総合的に考えた小学校家庭科の授業―日光をテーマにした授業実践―
奈良教育大学附属小学校　田中志穂
阪口美香
谷口明子
奈良教育大学教育学部　鈴木洋子
武庫川女子大学文学部　田中洋子

B３―４　3Dソフトの活用による住居領域の指導について
元女子栄養大学　尾崎沙和子

B４―１　他者に応答するシティズンシップ教育
「家族」の家庭科授業構想
秋田大学教育文化学部　望月一枝

B４―２　高校生の社会参画意識と，その関連要因の検討について
千葉大学教育学部　石島恵美子

B４―３　世代間交流の実践及び評価手法に関する検討
主観的指標と客観的指標の総合評価から
兵庫教育大学大学院　名嘉一幾
上越教育大学大学院　得丸定子

B４―４　家族支援から見た小児在宅医療における家庭科教員の果たす役割について
おやま城北クリニック　吉野真弓

B４―５　小学校家庭科の「くらし方のくふう」の学習を通して―友人との交流が学習活動に与える影響―
信州大学教育学部　小泉万里子
三野たまき

B４―６　生涯を展望して生活をよりよくしようとする生徒の育成
中学校家庭科におけるアクティブ・エイジングの学習
福島大学人間発達文化学類　角間陽子

B４―７　高等学校家庭科「介護保険制度と高齢者のQOL」の授業実践における授業評価
藤女子大学(非)　水上香苗
藤女子大学　岡崎由佳子
田中宏実
飯村しのぶ
高橋カツ子
坪田由香子
神奈川工科大学　楠木伊津美

B５―１　エレン・リチャーズの『ユーセニクス』(第２章から第４章)にみる家庭科の今日的意義
西南学院大学人間科学部　西野祥子

住田和子

B５－２　占領下日本におけるアメリカ家庭科教育情報の受容について
広島大学大学院教育学研究科　柴　静子

B５－３　小学校における「人間関係」教育と教科「家庭科」の役割
「人間関係」を内容とした家庭科の授業開発を通して
岡山県吉備中央町立大和小学校　信清亜希子
岡山県岡山市立西小学校　西谷圭二
岡山大学教育学部　蓮井有香
岡山大学大学院教育学研究科　佐藤　園

B５－４　小学校低・中学年における家庭科学習「何を食べているのか？」の実践と評価　　小学校低学年からの教科としての家庭科学習の実証的検討
岡山県吉備中央町立大和小学校　信清亜希子
岡山県岡山市立西小学校　西谷圭二
岡山大学大学院教育学研究科　佐藤　園

B５－５　中学校家庭科における「自分と被服との関係性の探求」を目的とした衣生活学習の試み
大阪市立新巽中学校　原田省吾
岡山市立中道中学校　小橋和子
岡山大学大学院教育学研究科　佐藤　園

B５－６　高等学校「家庭基礎」におけるホームプロジェクトの分析
鳴門教育大学　速水多佳子

B５－７　高等学校「家庭基礎」におけるホームプロジェクト指導法に関する研究
福岡県立八幡中央高等学校　加藤(植山)敦子

【講演・シンポジウム】

『活用型学力』をはぐくむ家庭科の実践と評価

基調講演：現代の子どもの生活環境の変化と学力の関係を考える―家庭科における「活用型の学力」の意味・意義と関わって―
奈良教育大学大学院教育学研究科(専門職学位課程)
小柳和喜雄

シンポジウム

＜パネリスト＞
能勢町立東中学校　忽那啓子
京都府立洛北高等学校　竝川幸子
兵庫教育大学大学院学校教育研究科　永田智子
＜コーディネーター＞
大阪教育大学教育学部　野田文子
＜コメンテーター＞
小柳和喜雄

【「課題研究」報告】

―『提案！今，家庭科だからできること』―

テーマ１　食をめぐる課題と家庭科教育の可能性

１－１　食に関する教育―行動の変容を目指した授業の検討―
大妻女子大学(非)　藤田智子
１－２　小・中・高等学校における調理実習の実態と課題
聖徳大学　河野公子

テーマ２　地域の生活に根ざす家庭科
弘前大学　日景弥生
岩手大学　渡瀬典子

テーマ３　多様化する高等学校における家庭科教育の意義と課題

３－１　家庭科の単位数をめぐる現状・課題と展望
福井大学　荒井紀子
３－２　家庭科の普通教育と専門学科の変動と課題
秋田大学　小高さほみ
３－３　現代の労働，社会福祉の諸課題に対応したカリキュラム構築―生活経営領域を中心に―
愛媛大学　藤田昌子

テーマ４　中学校家庭科教員実態調査・中間報告(理事企画)
山形大学　高木　直
＜コーディネーター＞
熊本学園大学(非)　桑畑美沙子
山梨大学　志村結美

(研究発表題目，発表者所属および氏名，その他大会概要については学会プログラムより転載。なお，ポスター発表は紙面の都合により割愛しました)

●お知らせ●

本小冊子「家庭科通信」を，ご希望の先生にはご自宅あてにお送りいたします。官製はがきに①お名前(ふりがな)②ご住所③お電話番号④勤務先をご記入の上，弊社家庭科教育編集部あてお送り下さい。FAXでも承ります。

宛先　〒101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24
大修館書店 家庭科教育編集部
FAX 03-3295-4774

Key Word ── キーワード

CA貯蔵

くだものや野菜等，青果物貯蔵法の一つ。CAは，controlled atmosphereの略で，「調整された空気」のこと。貯蔵庫内の空気中の酸素，窒素，二酸化炭素の割合を調整することで，青果物の呼吸を抑制し，蒸散などによる成分の消耗を遅らせ，発芽を抑え，鮮度を維持できる。初期のものは，果物の呼吸によって発生する二酸化炭素を利用したが，現在では二酸化炭素発生装置を用い，一定の組成の空気をつくり，CA貯蔵施設の庫内に送り込む。りんご，なし，かき，ぶどうや柑橘類などのほか，じゃがいも，にんじん，たまねぎ，にんにくなどに利用されている。

じゃがいもについては，当初，発芽を抑える効果に着目していたが，CA貯蔵で食味がよくなることもわかってきた。じゃがいもには，低温になるとでんぷんを糖に変化させ，その糖を使って呼吸するという性質がある。貯蔵庫内は低温で，でんぷんが糖に変化していく一方，CAで呼吸を抑えているため，糖が蓄えられて甘みが増す，というしくみとなっている。

巣ごもりリッチ

外ではあまりお金を使わず，自宅での消費にお金を使う人。たとえば，数万円もする高級炊飯器を買ったり，ヴィンテージ物として有名な１本10万円程度の高価なワインを買ったり，高級美術品のカタログ本を購入したりするなど，外に出てレストランやバーなどでリッチ気分に浸るのではなく，こだわりの部分だけは，家庭でぜいたく感を味わいたいとする消費者のことである。背景には，景気低迷が続き，外食を控えるなどの節約疲れなどから，シビアなやりくりのなかにも，生活にメリハリをつけたいとの志向があるともいわれている。

子ども・若者ビジョン

2010年７月，政府が決定した青少年育成をめざす大綱。2008年12月に策定した青少年育成施策大綱に代わるもので，ニートや引きこもりの青少年に対する支援を重点課題に掲げている。

具体的には，ニートの若者に就労支援をおこなう「地域若者サポートステーション」事業や引きこもりの相談窓口の各都道府県での整備などを盛り込んだ。また，青少年の「困難な状況」として貧困問題をあげ，子ども手当や高校の実質無償化をその対応策に位置づけている。

なお，ここでいう子ども・若者等の定義は，次のようになっている。

●子ども：乳幼児期，学童期および思春期の者
●若者：思春期，青年期の者（施策によっては，40歳未満までのポスト青年期の者も対象とする）
●青少年：乳幼児期から青年期までの者
※なお，乳幼児期からポスト青年期までを広く支援対象とすることを明確にするため，「青少年」に代えて「子ども・若者」ということばを用いている。
※乳幼児期は，義務教育年齢に達するまでの者
※学童期は，小学生の者
※思春期は，中学生からおおむね18歳までの者
※思春期の者は，子どもから若者への移行期として，施策により，子ども，若者それぞれに該当する場合がある
※青年期は，おおむね18歳からおおむね30歳未満までの者
※ポスト青年期は，青年期を過ぎ，大学等において社会の各分野を支え，発展させていく資質・能力を養う努力を続けている者や円滑な社会生活を営むうえで困難を有する，40歳未満の者

●詳細は内閣府Webページ（http://www8.cao.go.jp/youth/wakugumi.html）

学習ノート

新家庭総合[家庭037]・新家庭基礎[家庭046]教科書準拠

新家庭総合学習ノート

【体様】
生徒用 B 5 判 1 色刷　136ページ
教師用 B 5 判 2 色刷　136ページ
【定価】
生徒用　570円(税込)
教師用1,575円(税込)

新家庭基礎学習ノート

【体様】
生徒用 B 5 判 1 色刷　120ページ
教師用 B 5 判 2 色刷　120ページ
【定価】
生徒用　570円(税込)
教師用1,575円(税込)

●教科書準拠

「新家庭総合[家庭037]」「新家庭基礎[家庭046]」の各教科書に準拠。基礎知識の確認や教科書の理解度チェック，まとめに最適です。

●基本・実践・応用の 3 ランクの設問

基本ー教科書本文の穴埋め問題や用語選択問題，実践・応用ー調べ学習や資料を読んでの感想や自分の考えをまとめる問題，など「基本・実践・応用」の 3 ランクの設問を用意しています。

●解答編[教師用]もご用意

穴埋め問題や用語選択問題の解答とともに，記述問題採点のポイントを示しています。

授業ノート

高校家庭総合[家庭038]・高校家庭基礎[家庭047]教科書準拠

高校家庭総合授業ノート

【体様】
生徒用 B 5 判 1 色刷　224ページ
教師用 B 5 判 2 色刷　224ページ
【定価】
生徒用　800円(税込)
教師用2,310円(税込)

高校家庭基礎授業ノート

【体様】
生徒用 B 5 判 1 色刷　152ページ
教師用 B 5 判 2 色刷　152ページ
【定価】
生徒用　600円(税込)
教師用1,680円(税込)

●教科書同様の見開き 2 ページ展開

「高校家庭総合[家庭038]」「高校家庭基礎[家庭047]」の各教科書に準拠。教科書と同様に，学習項目に合わせて見開き 2 ページで展開しています。教科書の流れにそった学習をサポートします。

●基本から記述式応用問題まで幅広く対応

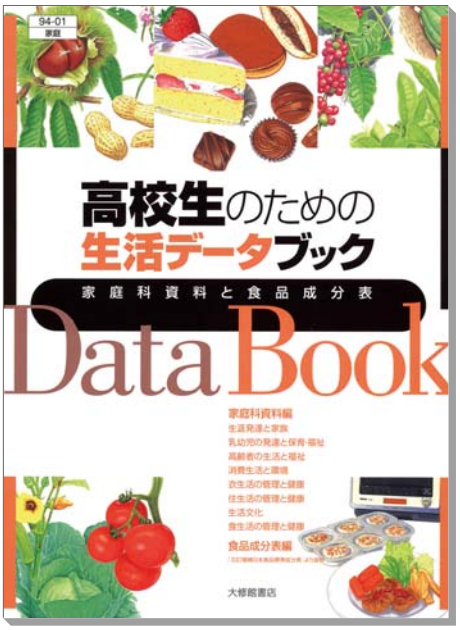
教科書の内容に合わせて，効果的な学習が展開できる課題を収録しています。授業に，自学自習に，課題提出に，幅広く活用できます。

●自由記述ができるノート部分付き

見開き 2 ページごとにノート部分(罫線)を設けていますので，この学習ノート1冊で学習の成果をまとめることができます。

▶ 高校生のための生活データブック 家庭科資料と食品成分表 ◀

豊富なデータ満載の家庭科資料編とビジュアルな食品成分表編の合本型



●学習を深める豊富な家庭科資料

学習上重要な資料や補足・発展的資料など，最新のデータ資料を豊富に掲載しています。併せて，一人ひとりが取り組める課題や小論文の学習にも活用できる読み物資料なども多彩に掲載しています。項目は学習指導要領の項目・内容に合わせて設定していますので，どの教科書を採用していてもご使用いただけます。

●グラフ形式でビジュアルな食品成分表

大修館書店の副教材としては初めて，グラフ型食品成分表を掲載しています。分析値より，身近な食品を中心に723品目・学習上必要な栄養素等18種類を抜粋。食品解説も充実しています。

【体様】 B 5 判 4 色刷　304ページ　　【定価】800円(税込)

◆資料編の内容

① 生涯発達と家族
- ●さまざまな家族・家庭
- ●男女共同参画社会
- ●働くということ

……他 5 項目

② 乳幼児の発達と保育・福祉
- ●子どもの成長・発達
- ●親になること
- ●子どもの権利と福祉

……他 4 項目

③ 高齢者の生活と福祉
- ●加齢にともなう心身の変化
- ●高齢期の豊かな過ごしかた
- ●介護の必要な高齢者への支援

……他 3 項目

④ 消費生活と環境
- ●お金の使いかた
- ●クレジットカードの落とし穴
- ●悪徳商法・詐欺
- ●地球環境の今

……他 4 項目

⑤ 衣生活の管理と健康
- ●被服材料の種類と性能
- ●被服の選択と購入
- ●多様化する衣生活

……他 4 項目

⑥ 住生活の管理と健康
- ●住生活の安全と管理
- ●共生のまちづくり

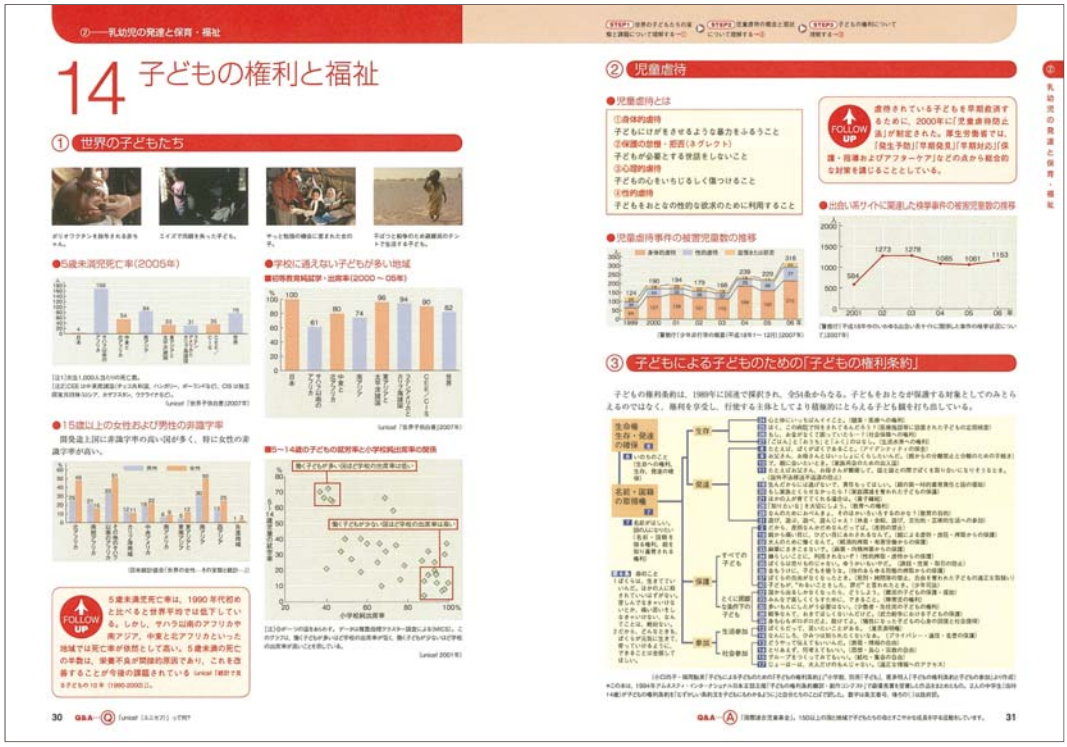
……他 4 項目

⑦ 生活文化
- ●生活文化をみつめる 実践課題

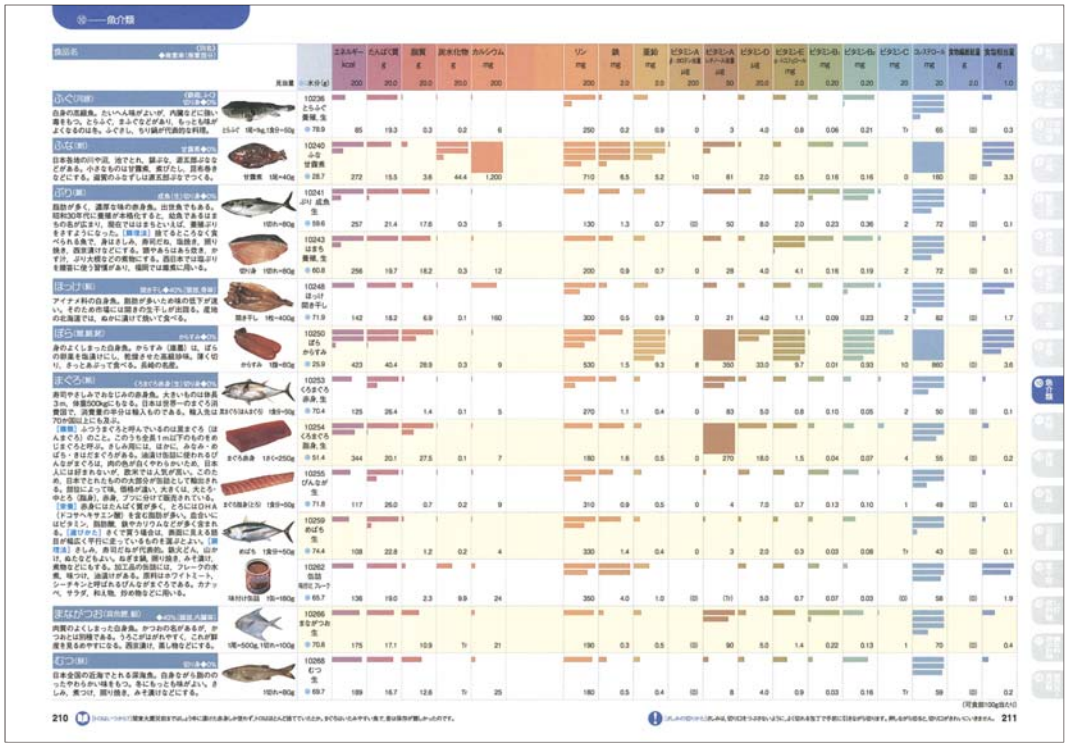
⑧ 食生活の管理と健康
- ●食生活問題
- ●これからの食生活
- ●人と栄養
- ●食中毒の発生とその予防
- ●食品添加物
- ●調理の基本

……他 9 項目

◆家庭科資料編実物見本



◆食品成分表編実物見本



（上下とも紙面見本はＢ５判見開きを38%に縮小）

▶ 高校生のための生活学改訂版 家庭科資料と食品成分表 ◀

家庭科資料集と食品成分表が一体になった，好評の副教材

家庭科資料編は，統計資料などの更新可能なデータについては最新の情報を掲載。授業の補足に，発展学習に，活用度の高い資料編です。食品成分表編は，「新カラーガイド食品成分表改訂版」から約1,000食品をピックアップしてコンパクトにまとめて収録しています。

【体様】 A B 判 4 色刷　320ページ　　【定価】840円（税込）

▶ 新カラーガイド食品成分表改訂版 食べることの楽しさを知る ◀

文部科学省　科学技術・学術審議会　資源調査分科会報告「五訂増補日本食品標準成分表」準拠

「五訂増補日本食品標準成分表」で分析されているすべての栄養成分について数値を掲載しています（企業提供の市販食品を除く）。また，「日本人の食事摂取基準（2010年版）」をはじめ，栄養関連の資料も多数掲載。「食事バランスガイド」についても巻頭口絵で特集しています。

【体様】 B 5 判 4 色刷　320ページ　　【定価】800円（税込）

▶ 高校家庭科ワークブック ◀

家庭科の基礎・基本が身につく

家庭科の基礎・基本を50のテーマで学ぶワークブック。自主的・創造的な学習を促します。教科書の種別に関係なく活用できます。

【体様】 B 5 判 1 色刷　144ページ　　【定価】600円（税込）

▶ 栄養計算&生活診断ソフト バランスチェッカー Ver 1.1 ◀

今話題の，栄養計算ソフト

自分の食生活を自分で組み立てられる力を育てる栄養計算ソフト。2時間の授業で学習できるプログラムにしています。入力内容，栄養計算の結果は「栄養診断」「生活診断」にまとめて表示。個別のアドバイスがつくなど，生徒一人ひとりに合った，実生活に密着した食の学習が展開できます。

【セット内容】
教師用CD-ROM 1 枚＋生徒用CD-ROM20枚
指導マニュアル（B 5判16ページ・授業プリント収録）
セットアップ・操作マニュアル（B 5判48ページ）

【動作環境】
対応OS　Windows 98/2000/Me/XP（2000以上推奨）
メモリ　128MB以上
【税込定価】94,500円　生徒用CD-ROMの追加販売　1 本4,620 円

エッセイ・和のある暮らし⑧

手づくりの縁起物

石橋富士子

文・イラスト／いしばし・ふじこ
イラストレーター。女性誌，教科書などの挿絵，イラスト，エッセイや手作り小物，半襟デザイン（和キッチュ）など多彩に創作している。「家庭科通信」の表紙イラストも創刊時から手がけている。著書に『知識ゼロからの着物と暮らす入門』（幻冬舎），『ぺたこさんの手作り生活』（フィールドワイ）などがある。ブログ「着物と和力（わ・ちから）」（http://petacokimo.exblog.jp/）も更新中。

東京は，さまざまなシーンで江戸時代が息づいているのを感じます。どんなに街並みが変わっても，空が狭くなっても，神社やお寺や鎮守の森があり，季節の行事がおこなわれています。

たとえば雑司ヶ谷の鬼子母神，冨士神社の冨士講，大鳥神社の酉の市，穴八幡の一陽来復など。お参りのときの楽しみは，手づくりの素朴なお供え物やお土産物です。

山開きの日に冨士神社に行くと，藁のヘビが売られています。赤い口を開いたヘビは，厄よけ水あたり，火防の縁起物で台所や蛇口に飾ります。

大鳥神社の酉の市で入手できる熊手ですが，私が好きなのは一番小さな竹と稲穂でつくられたもの。簪（かんざし）として日本髪に飾りたくなるような，シンプルで美しいアート作品です。

豊島区雑司ヶ谷の鬼子母神のお会式大祭に売られる「すすきみみずく」はススキを束ねてつくってあります。ふっくらとした形が美しく，私も見よう見まね，子どものころ近くの原っぱのススキを刈ってつくったことがありました。ミミズクを一つつくるのには，ススキが20本ほど必要でした。

このミミズクには伝説があります。200年ほど前，病弱な母の看病をしながら暮らしている貧乏な娘が，薬も買うことができず，毎日鬼子母神にお祈りしていました。ある日，娘の夢枕に蝶の姿の鬼子母神があらわれ，「すすきみみずく」のつくりかたを教え，これを売るようにと告げます。娘はさっそく「すすきみみずく」をつくり，門前で売ると飛ぶように売れ，薬も買え，しだいに母の病気もよくなったといいます。

先日新聞にこんな記事が載っていました。

ミミズクをつくる職人の方が高齢になり，つくるのをやめたとのこと。後継者もなく，それではミミズクのつくり手がなくなってしまうと心配した地元の人たちが，自分たちで伝承していこうと活動を始めたそうです。

各地で同じような問題が起こっているのではないかと心配します。なんとか絶やさず地元の有志で伝え続けてほしいと願っています。

Question & Answer

Q：イクメンプロジェクトということばを耳にしましたが，どのようなものなのでしょうか。

A：イクメンとは，「子育てを楽しみ，自分自身も成長する男性，または，将来そんな人生を送ろうと考えている男性」のこと。しかし，残念ながらこのイクメンの数は増えていないのが現状です。そこで，ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)政策を推進する厚生労働省が，「イクメンが多くなれば，妻である女性の生きかたが，子どもたちの可能性が，家族のありかたが大きく変わっていくはず。そして社会全体も，もっと豊かに成長していくはず」というビジョンを掲げ，2010年6月に立ち上げたのが，イクメンプロジェクトです(■1)。

厚生労働省の調査では，現在，約3割の男性が「育児休業を取得したい」と希望している一方で，実際の取得率は1.72%にとどまります。また，日本の男性が家事・育児をする時間は他の先進国と比べて最低水準となっており(■2)，そのことが子どもをもつことや妻の就業維持に悪影響を及ぼしています。

厚生労働省では，男性の育児休業取得率を，2017年度には10%に，2020年度には13%に上げることを目標に掲げ，実現にむけて取り組んでいます。

2009年，育児・介護休業法が改正されました。「パパ・ママ育休プラス」制度の導入などをはじめとする新制度を2010年6月30日に施行，男性が育児休業を取得しやすい環境づくりへと一歩を踏み出しています。

イクメンプロジェクトはこのような制度見直しと合わせ，社会全体で，男性がもっと積極的に育児にかかわることができる一大ムーブメントを巻き起こすべく発足したものです。プロジェクトの内容・実施方法などについて協議するため，各分野の有識者等で構成される推進チームを設置しています。育児を楽しんでいる，あるいはこれから楽しみたいというイクメンたち，またその家族や企業・自治体等を「イクメンサポーター」と名づけ，ともに時代を牽引していこうという試みです。

イクメンプロジェクトではWebページを情報発信の起点とし，イクメンとイクメンサポーターのプロジェクト参加を推進するべく，趣旨に賛同する個人，企業，自治体等の団体に広く呼びかけています。

〈Webページ〉
- イクメン＆サポーターの登録
- 企業の事例集や関係資料の公開
- 育休体験談の掲載
- イベント告知など

〈イベント〉
- 各種セミナー，シンポジウムなどの企画・運営
- 地域発信型のイクメン普及活動をサポート
- 参画企業との連携による活動など

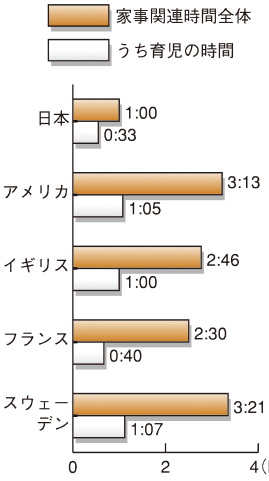
[詳細は，厚生労働省Webページ「イクメンプロジェクト」(http://www.ikumen-project.jp/index.html)]

■1 イクメンプロジェクトのロゴマーク

育てる男が、家族を変える。社会が動く。

ロゴマークでは，子育てする父親が家族のありかたを変え，自分自身も成長し，やがて社会の成長にもつながっていくというプロジェクトの意義を，「育」の漢字で象徴的に表現しています。このロゴマークに「育てる男が，家族を変える。社会が動く。」というスローガンを掲げ，プロジェクトの使命を伝えていきます。(Webページ「イクメンプロジェクト」より)

■2 6歳未満児のいる夫の家事・育児関連時間(1日当たり)



(内閣府「男女共同参画白書」2010年)

通巻43号
家庭科通信
2010年・3号
2010年10月25日発行

編集人　©大修館書店「家庭科通信」編集部
発行人　鈴木一行
発行所　株式会社大修館書店
〒101-8466　東京都千代田区神田錦町3-24
Tel(03)3294-2233(編集部)／(03)3295-6231(販売部)
振替　00190-7-40504　印刷・製本　壮光舎印刷
[出版情報] http://www.taishukan.co.jp
[家庭科情報室] http://www.taishukan.co.jp/kateika/

表紙イラスト・石橋富士子

毎日の授業に役立つホットな情報が満載!!

大修館ホームページ

家庭科情報室

http://www.taishukan.co.jp/kateika/

『出版物のご紹介』

家庭科教科書,および指導資料,副教材等を紹介しています。また,「Up Date」では家庭科出版物に関するQ&Aや新年度版のトピックスを補足しています。大修館書店教科書準拠シラバス案については「指導資料」に掲載しております。

《CONTENTS》

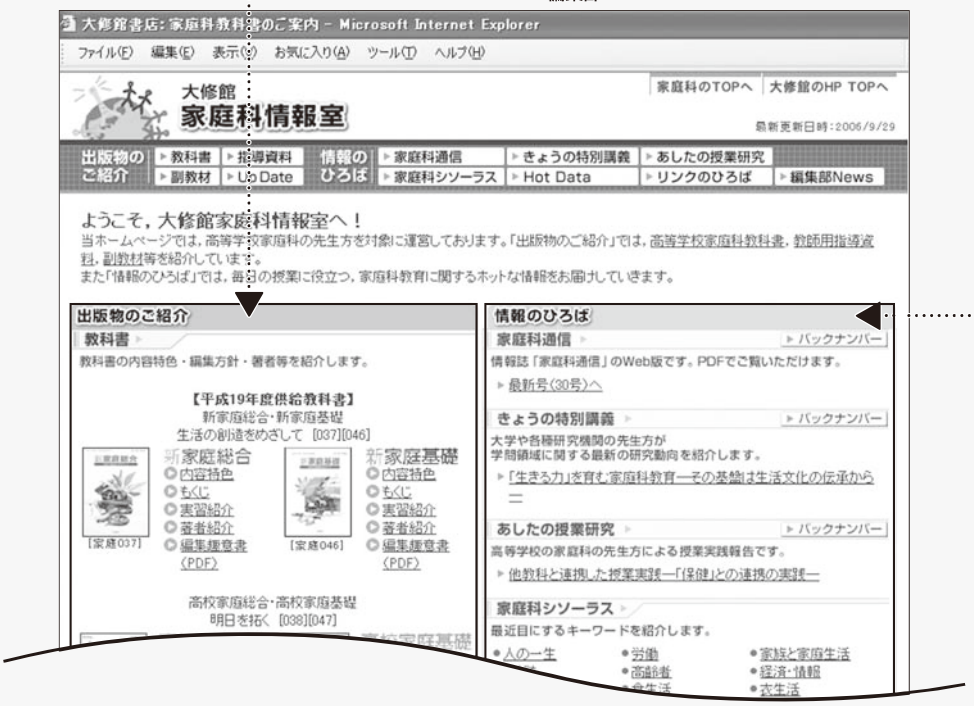
・教科書・指導資料・副教材・Up Date

『情報のひろば』

充実した資料・データや便利なリンク集で先生方の授業をバックアップ!!また,授業実践報告や最新の研究動向も扱っています。

《CONTENTS》

・家庭科通信
・きょうの特別講義
・あしたの授業研究
・家庭科シソーラス・Hot Data・リンクのひろば
・編集部News



新家庭総合

生活の創造をめざして
[家庭037]
●B5判・232頁●オールカラー

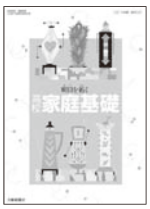
新家庭基礎

生活の創造をめざして
[家庭046]
●B5判・180頁●オールカラー

高校家庭総合

明日を拓く
[家庭038]
●B5判・226頁●オールカラー

高校家庭基礎



明日を拓く
[家庭047]
●B5判・162頁●オールカラー

家庭科への参加型アクション志向学習の導入

【22の実践を通して】

編著者❖中間美砂子
著者❖小椋さやか、久保田まゆみ、小谷教子、坂本理恵子、真田知恵子、新山みつ枝、野中美津枝、踏江和子

●B5判・179頁
定価2,100円（本体2,000円）
ISBN4-469-27001-6

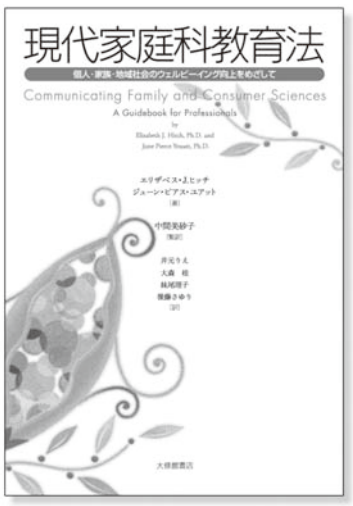
生徒が実際に行動することを通して能動的に学ぶ「参加型アクション志向学習」を取り入れた家庭科の授業例を22の実践から具体的に紹介。

せりふ完成法、アンケート調査、ランキング法、ロールプレイ、ワークショップ　etc.……生徒が実際に行動することを通して能動的に学ぶ「参加型アクション志向学習」を取り入れた家庭科の授業例を高等学校における22の実践例から具体的に紹介。授業の実際がわかるプリントやワークも掲載。中学校や小学校での実践にも適用できるヒント満載。

大修館書店　書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください。☎03-3934-5131

現代家庭科教育法

個人・家族・地域社会のウェルビーイング向上をめざして



［著　者］エリザベス・J.ヒッチ、ジューン・ピアス・ユアット
［監訳者］中間美砂子
［訳　者］井元りえ、大森桂、妹尾理子、後藤さゆり

●A5判・352頁　定価3,150円（本体3,000円）
ISBN4-469-26584-5

家庭科教育の今後を示す専門家のための手引き書

家庭科の新しいパラダイムに基づき、学習者中心の教育についてまとめた実践的教育解説書。学習者への配慮や学習者中心の学習計画づくりの重要性の指摘をはじめ、効果的な学習方法や新しい評価理論に基づいた評価法を、家庭科の主題例を示しながら解説。『家庭科への参加型アクション志向学習の導入―22の実践を通して』の背景となる、家庭科教育の今後を示す一書。

大修館書店　書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください。☎03-3934-5131

家庭科通信　第43号
2010年10月25日発行
〒101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24 株式会社大修館書店
定価320円（本体305円）
ISSN 1342-4637